

元 気 の 源 通 信

目標設計・人事労務・社会保険事務手続き・助成金

社会保険労務士 深川順次
福岡市東区香椎4-11-17-201
TEL 092-661-0552

(今月の言葉)

- ① 心のコップを上向きにし、鍛え、更に器を大きくする。
- ② 心づくり指導の中心は「態度教育」と「目標設定」
- ③ 心づくりは技術である。

(「カリスマ体育教師の常勝教育」 原田隆史)

2005年10月号(第44号)

「心、技、体」スポーツの世界でよく使われる言葉です。そして一流のアスリートは「心」を最も重視すると言います。この「心づくり」の名人がいます。カリスマ教師として有名となった原田隆史氏です。かれはすさんでいる中学校をたて直し、7年間で13度の日本一を輩出しました。

現在、ユニクロやワタミなど企業の人材教育でも活躍しています。

では彼の言う「常勝の心づくり」とはどういうものなのか。

常 勝 の 心 づ くり

心のコップを上向きにする

松下幸之助は「素直な心」を最も大事にしました。即ち「心のコップを上向きにする」ことです。心のコップが上向きになっていない限り、何事も学ぶことができない。原田先生は「心のコップを上向きにする」ためには態度教育が大切さであると強調しています。

「挨拶しても返事もしない。平気で遅刻し、忘れ物をする。指導してもまるで罪悪感がない」松虫中に赴任するや学校全体に「荒れ」を感じます。すぐさま生活指導を中心に学校改革に立ち上がりました。保護者にも「遅刻や物忘れのような気の緩みを放っておくと事故やケガの原因になる。家庭のほうでも注意してください」と文書を配りますが、一向に減らない。そこで遅刻してきた生徒たちを5分間「正座」させて話を聞かせたら、それが「体罰だ」と大問題となる。PTAの役員からも「原田を辞めさせてやる」教師からも「人権感覚がない」などと糾弾され、まさに四面楚歌の中で「学校改革」をはじめることになりました。

共鳴してくれた生徒を中核にして、道具なし、資金なし、練習場なしの中で、陸上部を再建します。彼は前任校でも陸上では大阪府一の実績をつくっていました。そして彼は内外に宣言します。「3年で全国大会で優勝する」「1年生が3年生になるときに日本一になる」

日本一という大きな目標のために「心・技・体」を鍛え上げる。今までは技術やノウハウ、体力づくり指導で大阪府一にすることができた。しかし日本一にはできなかった。そこで成功者、一流のアスリートから心づくりの大切さを学びます。心>技・体であると。

彼の心づくり指導の中心は「態度教育」と「目標設定」です。

「態度教育」-靴をそろえる、鞆を立てて置く、椅子を入れる、背筋をピンと伸ばすという静の教育そして挨拶や返事を率先して行う動の教育で習慣や身だしなみをつくりあげていきます。彼はこの「態度教育」を「心のコップを上向きにする」ことだと言います。心のコップが上を向いていなければ教えることができない。注ぎ込むことができない。彼は「靴をそろえる」ことでも率先垂範しました。最初の頃は彼がほとんど全部やりました。それに共鳴する生徒がでてくる、これが全校に拡がっていきました。

陸上部の生徒たちには、生活指導として家庭での手伝いもさせています。皿洗いや洗濯、風呂掃除などです。何かをまじめにやりきるためこの意味や達成感を体得させるためです。

心を鍛える

心づくりに大切なことは「目標設定」です。目標なしには鍛えようがありません。彼はここに「目標設定用紙」と「日誌」を持ち込み、目標を書いて書いて書きまくって反復連打で心づくりを行っていきます。彼は書く効用を次のように述べています。

「文章になった文字は、その人の考え、やる気、決意そのものです。そのため、長期目標設定用紙を使って目標を定め、日々の目標と反省を日誌に書かせ続けました。子供達を書いた文字に赤ペンを入れて添削し、子供達に返す指導を繰り返したのです」「書き続けていくうちに『日本一』『優勝』という目標のイメージがはっきりと鮮明に表れてきます。そのときにゴールにたどりつけるのです」

目標設定用紙を使って目標をイメージ化することを「心を使う」と表現しています。つまりビジネスでいうPDSサイクルのP（プランづくり）にあたるわけです。（ちなみに態度教育は「心をきれいにする」ことと表現しています）

陸上部に新入生が入ってくると練習初日に「3年後どうなりたいか書きなさい」と長期目標設定用紙に書かせる。もちろんすぐには書けるものではありませんから、過去に先輩達を書いたものを見せたり、先輩達が指導したりしてまず1枚完成させる。これが大切だと言います。

1年に20回以上の試合があります。そのたびに目標設定用紙に書かせる。それをパート長と指導上級生が添削指導する。それ以外に日誌を毎日書かせ提出させます。陸上部の書き物は国語や社会の宿題よりも多い。

指導を重ねるうちに、書く量が「強さ」に比例するようになってきた。よく書ける子ほど強い。競技力の向上につながってきたと言います。「頭の中が整理され、意識がたかまり、気付きの能力が高まり、練習の質も高まってきた」からです。

同時に、できることの継続、やり切り指導で心を強くしていきました。

こうして自己ベストや日本一を達成できるようになったのです。

心の器を大きくする

彼の心づくり指導の目標は自立型人間の育成です。その心をより大きく育てるためには仲間とともに成長することがかせません。1人で指導する人数は限られてくる。強いチーム、組織にするためにはリーダーを育て、成果を広め共有することです。

原田先生は、短距離パート、長距離パート、砲丸パート、走り幅跳びパートというようにパート制にし、そこにパート長をおきました。その判断基準は第一に人格、人間性で、その次が競技力です。さらに優勝すると陸上部に入る新入生も多くなりました。その時導入したのが指導上級生制度です。3年生が1年生にマンツーマンで教える。

「人を高めて人に教えてあげることが自分の喜びとなり自分を高めることにつながるから手を抜かないこと」「相手を強くしたら、自分も高まって強くなる。他人のために行ったプラスのことは必ず自分にも帰ってくる」

こうして指導上級生には格段に責任感が高まり、他を思いやる心が育ったと言います。

同時にパート長や指導上級生を通じて共有したのがコンピテンシー（強み）です。日々の練習内容、各試合毎の記録と考察、その膨大な資料の中からどうしたら記録を伸ばせるのかいつでも引き出し後輩を指導できるようにしました。

同時に「松虫の極意」を卒業する3年生に書かせます。心・技・体・家庭生活・学校生活に分けてそのコンピテンシーを箇条書きに書かせる。これを毎年1冊のファイルにしてまとめ、後輩達が共有できるようにしたのです。もちろん書いた卒業生達は「自信と誇り」を持って卒業できる。

こうして常勝の松虫中陸上部を育てていったのです。

心づくりは人づくり（人材育成）の原点（原田隆史）